

# 彌勒としての武則天

『大雲經疏』の考察

坪田 昭子

はじめに

まず、はじめに「彌勒としての武則天」を論じるに当たり、「武則天」という名について説明したいと思う。

「武則天」という名は、我々日本人にはなじみが薄い。「則天武后」としてならよく知られていると思われる。しかし、これは「中国の古い史書の伝統をそのまま踏襲したもので、彼女が高宗（唐の三代皇帝）の皇后であったという事実の一半のみを表面にだし、武周帝国を興したという事実の一半の女帝になったという重要な事実を隠すものである。」（中野美代子『中国ペガソス列伝』）とあるように正しい呼び方ではないといえる。日本では原百代氏が用いることを提唱したのであるが、近年中国でも「武則天」と呼んでいる。これらをふまえたうえで、私も、「武則天」の呼称を用いることにする。

さて、武則天は世で言われている、「武周革命」を起して中国史上、唯一女帝になった人物である。武則天

は女帝という地位につくために、『大雲經』という仏典を利用し、自らを「彌勒の下生なり」と称して、仏教と「武周革命」を巧みに結び付けた。本稿では、武周革命において重要な位置を占める『大雲經』との関係に焦点を絞って考察していきたいと思う。

## 一、『新作大雲經』について

そもそも『大雲經』とは、五世紀初の北涼時代に曇無讖（どんむせん）が訳した『大方等無相經』または竺仏念（じくぶつねん）訳の『大雲無想經』を指し、『大方等大雲經』またはたんに『大雲經』ともいう。經中には國王の仏教保護のことが高揚されている。この『大雲經』については矢吹氏の「大雲經と武周革命」（『三階教の研究』）に詳しく研究されているので、ここではそれを参考にしたと思う。その研究では、次のように述べられている。

曇無讖訳、大雲經は北涼玄始三年（四一四）より同

十年までに涼都内苑寺に於いて訳出せられ、五巻、六巻、四巻あるいは九十余紙と伝え、諸経録に見られし一古訳経なりとす。先ず、諸記伝を概括するに別生経を除き、古来大雲経は上述の前奏、仏念訳、曇無讖訳との二部となり、両者中、伝来の確的なるは曇無讖なりとす。

また、巻数や残されている目録から判断しても武后朝では曇無讖訳の『大雲経』が流行していたであろうということである。私もこの問題については曇無讖訳の『大雲経』とみるのが妥当な見解であると思うので、曇無讖訳の『大雲経』として以後、研究を進めて行きたい。

ところで、『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』『仏祖統紀』など史書にも、武后と『大雲経』の関係についての記述が見られる。それらによると、載初元年(六九〇)武后の寵愛を受けていた薛懷義をはじめとする僧十人で、当時流行していた『大雲経』をもとにして、新たに『大雲経』が作られたとすることができるとする。すなわち、大雲経を、「偽撰」(『旧唐書』)、「重訳」(『仏祖統紀』)としている。ここではそれを『新作大雲経』としておく。これまで多くの研究では、これらの史書によつて、武后が『大雲経』を新たに偽作したと考えていた。

『資治通鑑』によると、載初元年に表出された『大雲経』は四巻としているが、この経典は現存していないので、内容も分からない。また、『新作大雲経』は表出五

年後に撰定された「大周刊定衆経目録」に掲載されていない。そこで、今までは偽作、重訳であるから目録にも掲載されず、経典も伝わっていないのだとして片付けていた。

そのように、所謂『新作大雲経』の存在は疑われる事なく信じられていたのだが、武后が皇帝になるにあたり、重要な役割をもった経典が伝わっていないというのはまことに不思議である。本当に『新作大雲経』というものが存在していたのだろうか。

## 二、敦煌出土文書『大雲経疏』について

ところで、『新作大雲経』の存在を考えるにあたり、重要な文書が敦煌から発掘されている。それは、敦煌文書S・二六五八とS・六五〇二であるが、その考察に入る前に、発掘から現在に至るまでの状況を説明しておく必要がある。

敦煌文書は、イギリスの東洋学者オーレル・スタイン氏によつて一九〇七年に敦煌石窟から蒐集将来されたものである。

敦煌石窟は敦煌県の南東二十キロメートル、大泉河のぞむ石窟寺院で、敦煌千仏洞または莫高窟とよばれている。現在総数四百八十窟をかぞえ、一九五一年におかれた敦煌文物研究所の手によつて修理・調査が続けられ

ている。(以下の説明において出てくる石窟番号は文物研究所の付したもの)

ここで扱う文書の発見者であるハンガリーのユダヤ系出身のスタインは、一八六二年ブタペストに生まれ、ウィーン、テュービンゲン大学で学位を取った後、ハンガリー政府の派遣学生として二年間イギリスに留学し、オクスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学で東洋学と考古学を専攻した。

スタインは一八九八年から一九〇一年にかけて中央アジアにおける第一次の発掘調査を行った。第二次の発掘調査は一九〇六年に始まり、前回の調査地を経て、一九〇七年敦煌に入った。ここでスタインは敦煌郊外の千仏洞に居住していた番人の王道士が発見した石窟(第一七洞)内に塗り込めてあった三〇四万巻の古写本類を見る機会を得たのである。スタインはひそかに千仏洞修理費寄進の名目でこれを買収し、その三分の一を手に入れて帰った。またその翌年に、フランスのペリオ氏がきて、また三分の一を持ち帰ったが、北京政府はそのことを知って、残りをすべて北京に運ばせた。その前に大谷探検隊も若干を入手した。

発見された古写本の大部分は卷子本の仏典で、敦煌諸寺の蔵経であったものであるが、そのほかに、寺院経営の記録、祈願文類などもあり、さらに一般典籍や公私の文書類も若干含まれている。古いものは四世紀までさか

のぼるが、大部分は八〇〇年以後の書写と認められる。また、書物のほかに若干の仏面類も見出された。

現在、スタイン蒐集は、大英博物館(漢文)と、旧インド省図書館(チベット文その他)とに分蔵し、前者の総目録(L・ジャイルズ『Descriptive Catalogue of the Manuscripts from Tunhang in the British Museum』、一九五七)と後者の選訳(F・W・トーマス『Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan』一〜三、一九三五・五一・五五)とが公刊されている。ちなみにペリオ氏蒐集は、パリの国立図書館に蔵している。また、敦煌文書の写本は、現在黄永武主編『敦煌宝蔵』に収録されているので、今回はそれを参考にした。

さて、本稿で考察するスタイン文書、S・二六五八とS・六五〇二は、いずれも断片で、その名称、著者、製作年、または公表された年はすべて欠けているが、『大雲経』を引用し、注釈を施しているので、『大雲経疏』と呼ばれている。

S・二六五八については、一九二四年に羅福萇の『沙州文祿補遺』において、日本の狩野直喜博士が写した抜抄が掲載されて以来、諸学者の知るところとなった。

王国維氏は、『沙州文祿補遺』所収の『大雲経疏』が釈義する『大雲経』なる經典が、北涼の曇無讖が訳出した『大方等無想経』(『大正蔵』卷一二)であることを

指摘している。さらに、陳寅恪氏は、『大雲經疏』所引の『大雲經』が曇無讖訳の経文とほとんど全部符合することを理由として、大雲經偽作説を否定する。

そして時を隔てて、一九八四年、アントニーノ・フォルテ氏によって「『大雲經疏』をめぐって」（敦煌講座7『敦煌と中国仏教』所収）という論文が書かれた。この研究論文が今までのそれと大きく違うところは、S・六五〇二について考察しているということである。このS・六五〇二は、S・二六五八に比べ、五分の二ほど長いものであって、一卷でほぼ完全なものであるといえる。しかし、S・六五〇二は一九五七年にL・ジャイルズ氏の総目録によって存在が明らかになされていたにもかかわらず、フォルテ氏に取り上げるまでこれといった研究はされていなかった。フォルテ氏はその論文で『大雲經』の偽作は考えられないと断言している。

そこで、私は、フォルテ論文を参考にしながら、『大雲經疏』の構成を分析し、その内容を吟味することによって、大雲經偽作説の真偽を明確にし、さらに武則天が『大雲經』を活用して、どのような革命理論を主張しようとしたのかを、具体的に考察してみたい。

### 三、『大雲經疏』の構成

まず、『大雲經疏』の構成を図式化して分かりやすく

したいと思う。高さが三段階に區別してあるのはそれぞれ一段下の文がその前にある文の説明に用いられていることを示している。

#### 〈全体の構成〉

前欠（文字のはっきりしない部分がある。）

大雲經（巻四）

大雲經（巻六）

大雲經（巻四）（ここまでS・二六五八文書では欠けている）

大雲經（巻四）

「即以女身當王国土」＋注釈

謹按「證明因縁識」＋注釈

謹按「易」＋注釈

又云「證明因縁識」＋注釈

故「河図」云＋注釈

又云「證明因縁識」＋注釈

大雲經（巻四）

「得転輪王所統領處四分之一」＋注釈

大雲經(卷六)

「人民熾盛……無違佞者」+注釈

故「宣同師記」云+注釈

大雲經(卷四)

「得大自在」+注釈

按「広武銘」曰+注釈

「易」曰+注釈

「広武銘」曰+注釈

大雲經(卷四)

「舍利不可得……舍利乃可得」+注釈

大雲經(卷六)

「為欲供養……呵責毀辱」+注釈

故「広武銘」云+注釈

大雲經(卷四)

「教化所屬城邑聚落男女大小持五戒」+注釈

大雲經(卷四)

「從伏外道諸邪異見」+注釈

大雲經(卷四)

「汝於尔時實是菩薩為化衆生現受女身」

謹按「孔子譏」云

又按「衛元嵩譏」云+注釈

大雲經(卷四)

「女主自在遍閻浮提起諸寶塔」

又按「天授聖圖」+注釈

又「瑞石」云+注釈

又「龍吐圖」其文曰+注釈

大雲經(卷六)

「唯願如來為諸衆生說……產生一女名曰增長」+注釈

「涅槃經」云+注釈

「孔子譏」+注釈

「童謡」+注釈

大雲經(卷六)

「其王國土以生此女故穀米豐熟快樂無極」+注釈

按推「背圖」+注釈

故「中岳馬先生譏」曰+注釈

(これ以降はS・6502文書によつて初めて明らかになった。)

又「譏」曰+注釈

又「讖」

又「宣同師記」云十注釈

按「證明因縁讖」云

又按「嵩岳道士寂謙之銘」曰

又「西岳道士於仙掌得仙人石記」云

以上のように、『大雲經疏』は、『大雲經』に対する「疏」（経文の詳しい注釈）と定義できるものである。しかしこの「疏」は特殊な「疏」であると言える。なぜなら、この「疏」はある經典の全文、あるいはそのうちの一連の文章を注釈するものではなく、そのなかの敷衍を断片的に引用して解釈しているものだからである。

その箇所は『大雲經』中の大部分が第四巻に見られ、一部、第六巻にも見られる。また、第四巻から引用されている部分は浄光天女に対する授記で占められていて、この敦煌文書は、全体からも浄光天女に対する授記を自在に敷衍して注釈していることが伺われる。

しかし、『大雲經』の偽作という観点から見れば、『大雲經疏』の引用文と曇無讖訳の『大雲經』のあいだで一致を欠く箇所は取るに足りないものであり、これらの異同は、実際まったく些細なものである。したがって、『大雲經疏』の著者たちが、原型を変形して、引用文の形や内容を改ざんしたことはないということを断言することができる。

ところで、冒頭に「証明因縁讖曰く」とする引用文があるが、矢吹前掲論文では、その証明経関係のところを「証明因縁讖疏」と名づけ、大雲経関係のところの「大雲經疏」とその二部から、「武后登極讖疏」（この論文においては『大雲經疏』のこと）が作成されているとしている。また、所謂『新作大雲經』については「載初に懷義、法朗、宣政等の主謀に出でし新大雲經の重訳は、恐らく原本に抛らざる擬訳、捏造なりしが如し」とする。しかし、私はこれらの意見に疑問をもっている。

『大雲經疏』中に「証明因縁讖曰く」として引用されている箇所は二箇所あり、それは『大雲經疏』の前半と後半に見られる。後半部分はS・二六五八では欠けているため、S・六五〇二によってでなければ確認できない。前半部分に引用されている箇所の内容は、多少の字の異同があるにしても、『普賢菩薩説（此）証明経』仏説証香火本因経第二の経文と一致しており、そのまま引用されているように思われる。しかし、後半部分の引用は同じ語句が一所で見られるものの、文章としては一致しているとはいえない。

すなわち、矢吹氏が研究された文書は、残念ながら後半部分を欠くS・二六五八であった。だから、前半部分だけで判断したために、「証明因縁讖」と『普賢菩薩説（此）証明経』仏説証香火本因経第二の経文は同一のものであるとしたのは、やむを得ないかもしれない。

しかしながら、S・六五〇二によれば、冒頭の部分は、『大雲經』の経義を、「謹按」以下でさらに詳しく解説した注釈の一部分である。『大雲經疏』中にはこのほかにも、「孔子譏」、「衛元嵩譏」などの譏文の引用が見られる。いずれも『大雲經』の経文を説明するための引証文献である。後半部分も考慮にいれたとき、『大雲經疏』が作られたときにはすでに「証明因縁譏」というものが作られていた可能性が強いように思われる。

#### 四、彌勒仏下生の真相

では、どのように「証明因縁譏」が援用されているのか、『大雲經疏』から抜き出してみよう。

即ち女身を以て当(まさ)に国土に王たるべし。所謂(いわゆる)聖母神皇これなり。何を以てこれを驗(しら)べん。謹んで按ずるに、証明因縁譏曰く……。

「即ち女身を以て当(まさ)に国土に王たるべし」は、『大雲經』第四に見られる。この經典は淨光天女という女性が大涅槃經の深義を聞いた因縁によつて、女身をもつて一國の帝王となつて生まれるという教説で、女帝の出現にはきわめて好材料になるものであつた。しかし、『大雲經』には淨光天女に関する記述はあるが、彌勒に関する記述は見られない。

一方、『普賢菩薩説(此)証明經』は、経文中に老子化胡の話や、閻浮提中に振胆国という一大國のあることを述べるなど、一見して偽經(特に中國において作られた經典のこと)とすべきものである。その中には彌勒や天女という文字が見られる。

「証明因縁譏」は、彌勒が慈氏と訳されることから、慈悲は女性の象徴であり、彌勒がとりもなおさず太后(武則天)のことであるとして、太后は彌勒仏の下生で閻浮提の主たるべき人であるという教説を作り上げたのである。

かくして太后の前身は淨光天女から彌勒仏と結び付けられ、太后の革命を彌勒信仰に便乗させることになつたのである。

つまり、『大雲經疏』に先行して、『普賢菩薩説(此)証明經』の経文の中から武后が皇帝になるために都合のよい箇所を集めて作成した譏文が存在しており、『大雲經』の淨光天女から彌勒へと武后を化身させるには、その「証明因縁譏」が不可欠であつたわけである。

そこに、彌勒仏下生による武周革命の知られざる真相が存在しているのである。

史書に記録された武周革命のあらましについて語れば、垂拱四年四月に、武承嗣が瑞石を洛水で拾ひ、武后に差し出した。その石には「聖母臨人 永昌帝業」という文字が現れていた。もちろん武承嗣がだれかに刻ませたも

のである。このほかにも女帝の出現を予言するものと思われる現象、すなわち符瑞が幾つかあったが、それだけではまだ説得力がない。なぜなら中国には、古来、女の身で帝位についた例が全くなかつたからである。空前の女帝出現には、それにふさわしいムードが必要であつた。そこで、『大雲經』を「偽作」し、「太后は彌勒仏の下生なり、まさに唐に代わつて帝位につくべし」と言い出したのである。

彌勒仏下生ということは、仏滅後の仏教徒が遠い未来に描いた夢の一つであり、社会民衆にとつても大きな魅力となつていた。その彌勒信仰を帝位篡奪のムード作りを利用しようとして、当時広く流布していた『大雲經』に結び付け、太后の即位が仏の意志に合し、天下の泰平を招致するであろうと説いたわけである。

以上の史実を、『大雲經疏』の内容と照らし合わせれば、これまで考えられていたように、『大雲經』に彌勒仏下生説を混入させて偽作したのではない。『大雲經』の經文に対して、「証明因縁識」をはじめとする諸文献を用いて、新しい解釈を導き出し、武周革命の正当性を立証してみせたのである。

かくして、彌勒としての武則天が降誕し、中国史上唯一の女帝が実現することとなつた。

『大雲經疏』が、武周革命に果たした役割について、もう少し明確にすると、彌勒信仰だけを活用したわけ

はない。

『大雲經疏』中では、經文を説明するために、様々な讖文や符瑞を引用している。その中で引用されているものを順に挙げていくと、「証明因縁識」、「宣同師記」、「広武銘」、「孔子讖」、「衛元嵩讖」、「天授聖図」、「瑞石」、「龍吐図」、「涅槃經」、「童謡」、「背図」、「中岳馬先生讖」等である。これらの中には史書での記述と符合するものも含まれているが、「広武銘」が最も注目される。

『新唐書』本紀及び后妃伝によれば、垂拱四年（六八八）六月に汜水（しすい）で瑞石が発見され、水が広武と改称されたという。瑞石の銘文については、記載がないが、『大雲經疏』が引く「広武銘」がそれであろうと思われる。

『大雲經疏』は、「広武銘」を引用し、その銘文を解説して、『大雲經』と武后との関連づけを証明しようとする。その内容は、実に興味深い。

例えば、「離猫為 守四方」の銘文に対して、

「離猫（なんじ）の為に四方を守る」とは、易曰く、「離は明なり。位 南方に在り」と。又是れ中女なり。神皇 南面し、天下に臨むに属す。又是れ文明の応なり。「猫」とは武の象、武は聖氏に属するなり。

と注釈する。「離猫」の「離」は、『易』説卦伝では、



明であり、南方の卦であり、また中女に配当されている。神后（武后）は、武士教と楊氏との間に生まれた三姉妹のうちの次女であるので、中女である。また、「猫」は、武の象であり、神後の姓に關係するものである。だから、「離猫が人々のために四方を守る」というのは、神后が帝位に就いて南面し、天下に君臨することであり、「文明」の世となる符応である、と解説する。

さらに、次文の「三六年少唱唐唐、次第還歌武媚娘」に対しては、

「三六年少（わか）くして、唱うること唐唐なり」とは、三六は十八なり。一八子なるものは、李なり。此れ皇家の姓氏を頭かにするなり。唐は、聖朝の国号なり。「次第に還（めぐ）り、武媚娘を歌う」とは、此れ三聖の後に、即ち神皇 天下に臨馭するを明らかにするなり。

と注釈する。九九で三×六は十八になり、十、八、子の字を組み合わせると、李の字になる。それは、唐王朝の皇家の姓である。また、「武媚」とは、武則天が十四で入宮し、才人となった際に、太宗から賜った号である。そこで、唐の高祖、太宗、高宗の三聖の後に、神皇が天下に臨んで統治することを明らかにした銘文であるとする。

「李」字を分解して「十、八、子」とする説は、末尾の「歌曰、非旧非新、交七為身、傍山之下、到出聖人」

の文にも見える。すなわち、

「七を交えて身と為す」とは、女字を謂うなり。

「傍山の下より出て聖人に到る」とは、傍山は婦の辺、帯子の上傍に山の字安んずるを謂うなり。到出は帯の字の下に出字を到作するを謂う。即ち婦の字なり。此れ乃ち重ねて神皇の聖徳を頭かにするなりと注釈するように、「婦」という文字において、「七を交えて身と為す」が「女」、つくりの「帯」の上側に、「傍山」すなわち「山」字が横たわつており、その下側に、「到出」すなわち「出」字がひっくりかえつてゐることを指す。

こうした識文の技法は、讖緯思想の最も流行した王莽、光武帝の革命の時から頻繁に用いられてきたものである。今からみればもちろん荒唐無稽であり、「広武銘」が武后のために捏造されたものであることを暴露するだけであるかもしれないが、神のお告げ、帝王出現の予言として、人々を信奉させる魔力を十分に發揮したにちがいない。史書に記された讖文で、これほど具体的な記述は他に類を見ないので、その意味でも『大雲経疏』の史料的价值は高い。

ともかく、「広武銘」をもう一度引用してきて、そこめられている武周革命のメッセージを、詳細に謎解きしていることが理解できるだろう。

つまり、『大雲経疏』とは、『大雲経』の釈義書とい

う体裁を装いながら、それまでに存在した「証明因縁譚」や「広武銘」などの譚文や瑣記を集大成して、武周革命の理論的な正当性を確固たるものにしようとしたものであつたように思われる。

おわりに

本稿では敦煌から発掘されたスタイン文書『大雲経疏』を中心に、武則天に関する考察をしてきた。この文書の内容を検討することによつて、いままで誤解され、見失われてきた真実を、少しではあるかもしれないが、解明できたように思う。これまで武則天は残酷な行爲ばかりが取りざたされ、後世の史家から非難の的になつてゐるが、一概に武則天は悪女であるとは言えないのではないかという思いが強くなつた。確かに、自分に反対する者について残酷な殺害を行ったことは史実であるが、武則天は一流の門閥の出身でなかつただけに、その政治は因習にとらわれるところがなく、たえず民衆を考慮に入れており、大衆性や公開性と言われる面では従来とは違つてゐる点、また、内容の伴わない家柄を無視し、実力のある者を序列を問わないで抜擢した点、また女性特有のキメの細かさをもつて、その周囲に巧みな人間関係の網をはりめぐらした点など、実にすぐれていると言へる政治感覚を見せている。だからこそ、五十年にわたつた

て事実上の権力者でありえたわけである。

すばらしい政治的能力を持つていたから、残酷な行爲はいたしかたないと言ふことはできないが、悪女であれ、いづれにしてみても、武則天は並大抵の女性ではないことをこの研究を通して強く感じさせられた。だから、

「武則天は『大雲経』を都合の良いように偽作して、武周革命のために悪用した」という史書の酷評を是正することができたのは意義のあることであると考へている。

『大雲経疏』からは、まだまだ新しい真実を発見することができるとも思はない。しかし、これは今後の課題としておきたい。

《参考文献》

王国維「大雲經疏」(『沙州文祿補遺』一巻、附録一巻、一九二四年)

一九二四年)

矢吹慶輝「大雲經と武周革命」(『三階教之研究』第三部、付篇二、岩波書店、一九二七年初版、一九七三年復刊)

陳寅恪「武翠與佛教」(『歷史語言研究所集刊』第五本

復刊)

第二部分、一九二八年)

湯用彤「矢吹慶輝三階教之研究跋」(『史學雜誌』二巻、一九三一年)

青麻弘基「支那仏教史上に於ける則天武后」(『鴨台史報』五、一九三七年)

一九三一年)

横田滋「武周政權成立の前提」(『東洋史研究』一四一四、一九五六年)

松島才次郎「則天武后の稱制と篡奪」(『信州大学研究論集』一九、一九六七年)

岸田知子「則天武后と三教」(『待兼山論業(哲学篇)』八、一九七五年)

西村元佑「武周革命における佛教政策とその政治的背景」(『龍谷大学仏教研究所紀要』一五、一九七六年)

アントニー・フォルテ「大雲經疏」をめぐる

(『講座敦煌7』敦煌と中国仏教) 大東出版社、一九八四年)

林語堂「則天武后」(小沼丹沢 みすず書房、一九五九

年)

郭沫若「則天武后・筑」(須田楨一訳 平凡社、一九六三年) 須田氏解説・淫蕩残忍の女妖か開明政治家か?

武后レーゲンデをめぐる

外山軍治「則天武后」(中央公論社、一九六六年)

原百代「武則天」(一九七八年)

澤田瑞穂「則天武后」(集英社、一九八六年)

松本清張「3、長安と奈良」4、則天武后の話」5、武后聚像」(『古代の終焉 清張通史6』講談社文庫、一九八九年)

中野美代子「女帝武則天」(『中国ペガソス列伝』日本文芸社、一九九一年)